一枚の写真から

第1回：鳥居弘忠・鳥居瑤子

DANCE ICONS

真っ赤な衣装に身を包み、
武道館の会場で輝かしい光を放つ鳥居カップル。
この一枚の写真を手に取り、
「一番の檜舞台は武道館だった」と話してくれた。
幾度となく、チャンピオンという称号を手にしてきた２人。
しかし、その道筋は決して平坦なものではない。
不安、衝突、歓喜――。様々な感情が渦巻いた現役時代。
そんな当時を振り返って頂き、お２人にお話しを伺いました。

Hirotada Torii & Yoko Torii

Hirotada first became interested in dancing during his freshman year at college, at which time his mother managed a dance school in order to earn the money to raise her three children. His mother, however, didn't believe that dancing was not an appropriate career for a man.

Hiro faced a lot of opposition to his intention to become a dancer, but his strong determination won over those who opposed his plans, and indeed his mother championed him a great deal in the years that followed. Her words "If you do it at all, be a champion" were a great source of motivation to him.

He gave his all to dancing, his performances improved steadily, and he became an A class professional at the age of 24. Several years later, he paired with Yoko who even though she was a beginner with no competition experience, showed flashes of brilliance. They practiced strenuously every day until 2 am — and sometimes until dawn!— Their fierce determination to always "be champions" motivated them to continue with their rigorous practice regime.

There came a time when their impressive spate of improving form stalled and it was decided that they should travel to England to study dance techniques there, which they did in the autumn of 1972.

The English style of dance came as a complete shock to them, clashing totally with their own style. They quickly realised that they had to forget everything they had learned, go back to the drawing board and start learning again from scratch.

People thought that they were crazy, but they practised all day, every day from 5 a.m. The world latin champion at this time was Alain Fletcher who, with his long legs (which came up to Hiro's chest height) was graceful and sophisticated in his dancing style. Hiro, on the other hand, had a typical Japanese physique and it was therefore impossible to beat Fletcher in competition.

During their 17 months stay in England, Hiro and Yoko had eyes only for dancing and they ignored everything else England had to offer. Their only desire was to be champions.

In 1975, Hiro and Yoko became the first Japanese couple to win the Latin American title at the Japan Open Championships and they came to prominence in Japan. They won a Latin title in Germany in 1977, becoming the world's premier Japanese dancers. Hiro pulled a calf muscle a more ten days before the championships due to over practice and on the day of the championships, although pain free, he pulled the muscle again during the preliminary round. He was left with a stark choice : continue dancing on the day, even though it might effectively end his dancing career prematurely, or withdraw from the competition. He chose to dance and, shedding copious tears at the thought of his career in tatters...and with Yoko's support, they went on to became champions —the first Japanese champions! — and it was to be a triumphant day, "the best day" for Hiro and Yoko.

1976 saw them finish third at the Blackpool dance festival in the professional Latin section, their names imprinted on the world's most authoritative and historic dance festival. Sadly, no other Japanese dancers have managed to surpass Hiro and Yoko's momentous achievements.

They Single-Mindedly pushed forward in their careers as dancers and finally retired in 1982.

チャンピオンになることを決めて、ダンス界に入った。

――まずは、ダンスを始めたキッカケを教えて下さい？

鳥居先生：私の母が人の薦めで、自宅でダンススタジオを始めたのがキッカケですかね。元々私の両親は、大阪市の船場で、ワイシャツの製造販売を営む問屋を経営していたんです。でも、戦争で親父が死んで、店が乗っ取られて。それで、引っ越した家に広間があって、そこを使ってダンス教室をやってみないかって、西部ダンス界の創設者の1人である上野洋太郎先生から言われて、母親が教室を始めたんです。で、何周年かのパーティの時に、母親が僕に、デモをしろと言ったんですよ。で、デモに出るのなら習わなきゃっていうことで、習いに行ったんです。そしたら初めてのレッスンで先生に、「すっごい素質あるから、本気になってやれ。必ず日本一にしてやるから」って言われて。デモも、皆がえらい褒めてくれたし、僕自身、スポーツも音楽も大好きだし。でも母に、ダンスやるって言ったら猛烈に反対されてね。男の一生の仕事じゃないって。それでも絶対やるって言い張ると、チャンピオンになることを目標にするならやれと、OKが出たんです。だから僕は、チャンピオンになることを決めて、ダンス界に入ったんです。

――それからは、ダンスダンスダンス？

鳥居先生：そうですね。とにかく練習練習で、人の何倍も練習してましたね。一番初めに出たアマチュアのコンペで5位になって盾もらって、増々やる気になってね。その後は、仮のパートナーでA級までいったんです。それから、瑤子の前のパートナーと組んで丁度1年目位の時にレアード先生の単独審査で優勝したんですよ。大阪で。

――単独審査で！しかもレアード先生ですか！

鳥居先生：レアード先生ですよ！もう神様ですよ。でもそのパートナーとは色々あって別れて、パートナーを探している時に、瑤子を紹介してもらって。

――最初にお会いした時はどんな印象でしたか？

鳥居先生：声をかけたらやる気満々だったんですよ。それで、踊ってみないとわからないと思って、一度踊ったんですね。そしたら、思い切りの良さに驚いてね（笑）。それに、相性とか背の高さ、べっぴんの度合いとか、総合的に彼女は他の候補者に比べて抜群だったんです（笑）。

――瑤子先生の印象はいかがでしたか？

瑤子先生：なんかチャンピオンになった人だって聞いてたけれどもね、イメージがね……。チャンピオンてお金持ちや思ってたんですけどね、全然お金持ちじゃないしね、普通の人だった（笑）。

鳥居先生：まあはっきり言って、お金は持ってなかった。当時、日本一高い先生のレッスンを頻繁に受けていたので（笑）。とにかく、そんな彼女を僕はえらい気に入って、紹介して下さった方にお願いしたところ、待てど暮らせど返事全然ない。それでね、ある競技会で彼女に会ったので、「返事ないけど何してまんねん」って言ったら、「あんたこそ」って（笑）。お互い返事がないなーと思ってたら、紹介してくれた人が邪魔してたんです（笑）。それで、2人ともやる気満々だったので、早速次の日から（笑）。で、1年間コンペに出なかったらA級陥落しますから、2週間で1種目仕上げて、その覚えたてのグループでコンペ出て……。成績がいいはずないですよね。半年間全部一次予選。でも、丁度半年経った頃には、西部日本のモダンとラテン、両方に決勝入りですよ。もの凄い変わり様でしょ！しかも11ヶ月目には、外人の単独審査の全日本戦で9位！

――凄いですね。瑤子先生はどんなお気持ちだったんですか？

瑤子先生：最初は予選落ちばっかで、私が下手やから私の責任でしょう。この人、前はファイナリストだったのにね。ものすごく毎日が嫌でね。それに、コンペにも出たことがなかったから、どんな風にお化粧していいのかもわからないし、踊ってどんな顔していいのかもわからない。そういうことは誰も教えてくれないしね。もう不安でいっぱいだし、成績は悪いしで、どうなるのかしらって思ってましたね。

――でも、カップル解消という考えはなかったのですね。

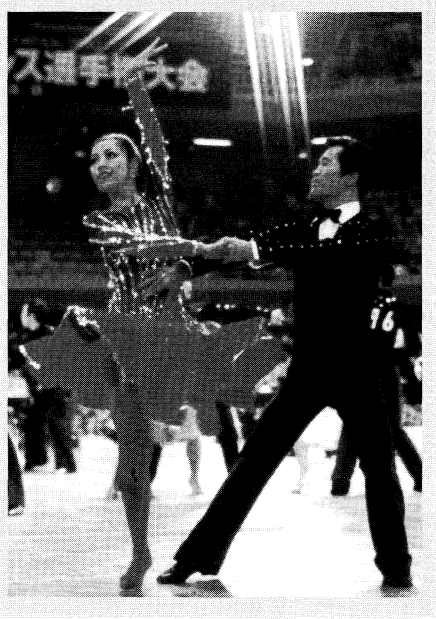
瑤子先生：それはないですね。チャンピオンになりたかったからね。

鳥居先生：コンペ出たことない人捕まえて踊るねんから、やりたいことはできないし、へぼいしで、それは

DANCE ICONS

第1回日本インターナショナル選手権

ラテン決勝ステージで、
デビット・シカモアと戦い見事優勝した。



もういちいち腹が立ちましたよ。だけど、投げ出すようなことはなかったな。

瑤子先生：とにかく、毎日が無我夢中でね。あんまり練習するもんですから、貧血になりましたよ。それとね、グループにスピンが多かったので、スピンの練習ばっかさせられて。もー船酔い状態ですよ（笑）。

鳥居先生：1人で、フロアの端から端までクリクリクリって回って、向こうまでいったら、また回って戻ってくる。その繰り返し。

瑤子先生：気分悪いって言っても、やめようかって言う人違うんで。まぁ、言えないですけど（笑）。

鳥居先生：言ったらげんこつ飛んでくるから（笑）。

瑤子先生：だからどうにかやるわけですよ（笑）。もー、オエーとなりそうなんですよ。でもそのオエーが何日もやってると平気になってくるんですよね（笑）。

鳥居先生：うちの母がよく言ってたのは、5回やって出来なければ6回やれと。100回だってやってみろいうんですよ。

――そんなハードな練習を嫌だとは思わなかったんですか？

瑤子先生：嫌だとも思うし、もー無理かなっても思いますよ。でもね、〝チャンピオン〟っていう文字が頭に出てくるんですよ。

――チャンピオンのイメージが辛い練習を乗り越えさせたんですね。そもそもお2人はラテンとモダン、どちらから始められたのですか？

瑤子先生：両方やってました。

鳥居先生：どっちかに重きを置くんじゃないんです。10種目一緒です。全部のチャンピオンになりたかったので、不得意があっちゃ勝てない。だから不得意な種目はよく練習しましたしね。それが勝つ方法ですよ。

――では、77年の10ダンスで優勝された時は、夢が叶ったという感じですね。

鳥居先生：そうですね。

瑤子先生：3位以内にはなれる自信はあったんですよ。でもまさか優勝できるなんて思ってなかった。誰もがピーター・マクスウェル氏が穫るって思ってたんですよ。それで私たちが優勝したから、もー皆さん凄い感動されて、泣いてもらってね。

鳥居先生：実を言うと、あの時足が肉離れしてて、これが最後のダンスになるかもしれないって思ったら、踊ってて涙ぽろぽろ出てきてね。そしたら優勝でしょ。その先のオナーダンスの時なんか、痛さ全然覚えてない。

瑤子先生：準決終わってね、この人棄権したい棄権したい言うてたんですよ。でね、普段偉そうに言うてるくせに、何が痛いんだって（笑）。初めて出られたんですよ。だから、折角出られたチャンスを逃がしてなるものかと（笑）。

――そうですよね（笑）。その執念が実ってということですね。翌年、2度目のチャンピオンになられた時はどのような感じでしたか？

鳥居先生：それはもう、なるべくしてなったっていう感じ。自信満々でしたよ。

――なるほど。ところで先生は、先ほどから形を取る時に、スタンダードの形をしますが……。

鳥居先生：それは両方やってる証拠です。

――いえいえ、「鳥居」っていったらラテンじゃないですか。

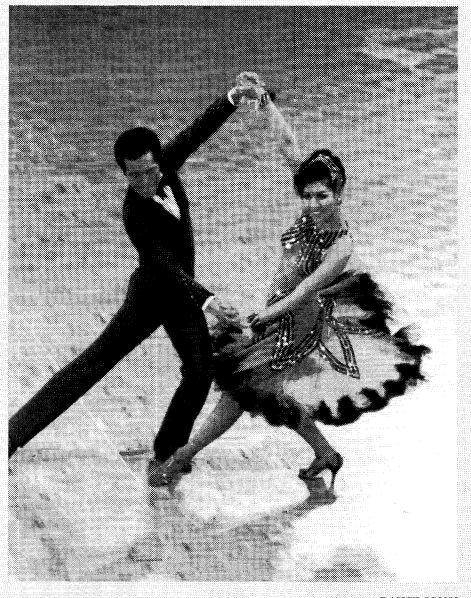
鳥居先生：それは皆さんが勝手に思ってるだけ（笑）。だから僕よくね、ラテンと言われると頭にくるんですよ。僕はラテンダンサーじゃなく、10ダンサーだって言い直します（笑）。

――失礼しました（笑）。話は変わって、イギリスにはいつ頃から？

鳥居先生：初めて行ったのは1972年。でね、期待に胸膨らませて行ったんですよ。なのに到着した日から5日間ずっと雨が降ってね。しかもレッスンもないし、暗いし寒いしで、こんな国に何しにきたんだろって思って、帰りたくなりました（笑）。でも、結局7ヶ月だった予定を、1年7ヶ月に延長してね。帰る頃には、帰りたくないって。もうちょっといればもっといいものになるのにって。

瑤子先生：今の人は、スポンサーがついたりして、ドレスもらったり、靴もらったりするでしょ。うちらなんて、ドレス代はいるわ、レッスン代はいるわ、飛行機代も高いわで、全てが大変だったんですよ。だから、海外に行く前に働いて働いてお金貯めて、向こうでは一切無駄遣いはしない。でも、今の人はイギリス嫌いってあまり行かないみたいね。

鳥居先生：イギリス嫌いでもアメリカ嫌いでもなんでもないのよ。練習嫌いなのよ。



DANCE ICONS
第2回日本インターナショナル選手権
アメリカのグランドファイナリスト、ロンモンテースを破り2連覇を果たす。

瑤子先生：いや、寒いからとか食べ物まずいからとか。そんなん贅沢やわ（笑）。もうね、その考え方が嫌い（笑）。

鳥居先生：どの時代にもね、好き嫌いはあるし、良い悪いはあるけど、良い悪いとかなんとか言ってる場合じゃないって。悪くても行ってやってみろって言いたいよね。

家でもお金でもない。〝チャンピオン〟が欲しかった。

――それでは最後に、ダンサーの人達へ。

鳥居先生：色々あったけど、考えることはただ一つ、世界チャンピオンになる事だった。1つの目標持ったら、それに届くように必死にやるだけ。だから、朝の10時からの練習で駄目なら9時にすればいい、それでも駄目なら8時、7時、最終的には5時ですよ。決めりゃあいいんですよ、なるんだと！

瑤子先生：でもね、今考えたらやってはいけないことばっかりやってて、正しいことは少ないんですよ。色々やってるつもりが勘違いだったり。で、あーじゃこーじゃと苦労する中に、ひらめきいうのがあるんですよ。〝これ！〟っていうね。そのひらめきが大事。いくらええ事聞いたってね、その時わかってるだけで、実際はわかってないんです。だから、苦労した中から生まれるひらめきゆうのは天からのプレゼントだと私は思うんです。

鳥居先生：色んな失敗をするからこそ、その中にひらめきがある。だから、失敗も必要なんですよね。それから、踊りが良くっても衣装が悪けりゃいけないしね。そういう色んな角度からダンスを分析してみるとチャンピオンなんていうのは簡単になれるんですよ。

――なれません（笑）！

鳥居先生：なれます！ 僕らは、ものすごく簡単にチャンピオンになった。

――いや、なってません（笑）！

鳥居先生：人から見たら、ようあんな努力するなって思うかもしれないけど、自分の中ではそれが当たり前の努力だと思ってるので。よくね、「俺と一緒のことやったらチャンピオンなれるぞ」って言うと、「やります！」って言うんですけどね、3日やったらお手上げですよ（笑）。

瑤子先生：もちろん死にそうでしたけどね。壁にぶち当たったり、辞めたいとか思う事はありましたよ。でも、そんな風に思う中でも、やっぱり〝チャンピオン〟っていう文字が出てくるんですよ。何が欲しいか言うたら、家でもないしお金でもない。チャンピオンが欲しかったんです。他は何もいらなかった。

鳥居先生：登山もそうでしょ。エベレストなんか、もう命がけでしんどいし、はあはあぜえぜえ言いながら寒いとこ登ってくでしょ。何のため？っていったら、ただたんに山頂征服したいだけでしょ。それに近いもんですよ。目的達成するためだけの努力。〝なりたい！〟と思えば少々の努力が平気でできるっていうんですよ。

――その気持ちはとても大切ですよね。本日はありがとうございました！ それでは先生、次号にどなたかをご紹介して頂けませんか？

鳥居先生：そうですねー。では、私の心の友、毛塚鉄雄先生を。

DANCE ICONS

会食の時に撮影した1枚。（撮影者は毛塚鉄雄先生）

左から、ニーナ・ハント、ビル・アービン、ボビー・アービン、山本千恵子先生、毛塚鉄雄先生、毛塚雅子先生、鳥居瑤子先生、鳥居弘忠先生。

鳥居弘忠・瑤子

PROFILE

75年の全日本選手権ラテン部門で初優勝を飾り、名実共に日本のトップに立つ。その後も数々の名だたる大会で輝かしい成績を残し、77年の世界10ダンス選手権では、日本人として初の世界チャンピオンという称号を獲得した。さらに、翌年の同大会も制し、二連覇を果たす。未だかつてこの功績を超える日本人選手は、現れていない。

鳥居ダンススクール
TEL.06-6858-5539（豊中教室）
TEL.06-6348-1568（梅田教室）
TEL.06-6426-3711（塚口教室）
http://www.torii-dance.com